小山工業高等専門学校研究紀要
第 4 0 号 (2008) 11 − 20

高専国語におけるディベートの指導

－授業効果を高める教材のあり方－

Guidance of "Debate" in Japanese Class of College of Technology
-Toward the Development of Effective Teaching Materials-

柴田　美由紀
Miyuki SHIBATA

１．はじめに

本研究は、高専国語を、コミュニケーションスキル教育を積極的に取り込んだ独自性のあるジャンルとして構築することを目指すなかで、その一環としてのディベート指導について、効果的な教材のあり方とは何かという観点から、指導法を模索するものである。

平成２年度から平成16年度までのディベート授業資料をもとに、教材の有無や改変が授業の質にどのように反映したかを分析することで、授業効果を高める教材のあり方について具体的に検討していく。その検討のなかで、指導の方向性についても再確認していきたい。

本研究を通じて、高専におけるコミュニケーションスキル教育、殊に急務とされている「話す」分野における教育の充実に寄与できると考える。

２．現状と課題

高専においてコミュニケーションスキル能力(注1)の育成が強く求められる昨今、コミュニケーションスキル教育に取り組み始めている高専は少なくない(1)。全国高専の平成14・15年度のシラバス調査によれば、「『コミュニケーションスキルとしての国語』教育を積極的に行う、もしくは意識的に標準的な国語の授業に取り入れている」ことがシラバスから読みとれる高専は、「17パーセントに上る」(調査対象50高専)とされ、これは「工業界・社会の要請に高専の国語教員が対応し始めている無視できない数値」であると指摘されている。

しかしながら、その内実を見ると、「高専の全『コミュニケーションスキルとしての国語』教育の内、80パーセントの取り組みが、「書く」能力育成に向けられている」のであり、「「書く」能力育成に偏重している」といわざるを得ない状況がある。しかも「書く」能力育成のほとんどを読書感想文等の作文と漢字テストが占めるという実態は、「書く」能力育成についても改善の余地が十分に残されていることを伺わせる。

「「話す」能力育成への取り組み」をみると、「全『コミュニケーションスキルとしての国語』教育のうちわずか13パーセントに過ぎない」(稿者注：全シラバスの２パーセント)ことがわかり、「「話す」能力育成の充実が、今後高専のコミュニケーションスキル教育にとっては、緊急に対応しなければならない課題である」ことが浮き彫りにされている。

「書く」能力育成については従来より重視され、積極的に取り組まれてきた経緯がある。例えば、平成３年度実施の「高専国語教育に関する第二次調査」(2)では、「表現力向上の試み(実践例)と課題」に回答した全員が「書く」分野への取り組みを挙げている。具体的には、小論文・読書感想文・要約文などである。「話す」分野を実施していると回答したのはわずかで、回答した国語担当教官86名(回答校58高専)のうち３名にすぎない。「表現力」といえば「書く」ことという時代が長く続いていたのであったが、いつまでもその延長線上に留まっているわけには行かない。今後は「書く」能力育成を得意分野として生かしつつも、「話す」能力育成について積極的に幅を広げていく必要がある。

「話す」能力育成について、その必要性が認識されているにも関わらず、浸透が鈍いのはなぜか。理由として、適切なテキストがないことが、コミュニケーションスキル教育全体、なかでも「話す」分野へのハードルを高くしていることが考えられる。「まだ『コミュニケーションスキルとしての国語』教育のための定番の教科書は存在せず、各校共に各教員の判断で選択されているのが事実である」(3) という現状なのである。「国語表現Ⅰ」「国語表現Ⅱ」を始めとする検定教科書や、表現法のテ

キストなど数々出版されてはいるが、実際に高専国語、特に３学年以上の「話す」分野に質・量ともに適合するものは見つけ難い。

本研究が対象とするディベートについても、関係の書籍は多数あるが、大半はノウハウ本であり、高専国語での取り組みに直接役立つものは管見に入っていない。各種検定教科書はこぞって表現の項目にディベートを取り上げてはいる。しかし、高専国語に望まれる論理性・実証性を兼ね備えた議論の姿を求めていくと、やはり独自の教材が必要となってくる。

高専国語の実状に合うテキストが無いことの背景には、テキストの前提となる指導方法の開発が未だ不十分であるという状況も推測できる。指導する側も、「書く」分野に堪能ではあっても、必ずしも「話す」分野におけるコミュニケーションスキル教育をくぐってきているわけではないという状況もあろう。外発的な要因からコミュニケーションスキル教育に取り組まざるをえない状況に置かれたものの、「話す」分野については指導法に戸惑うケースもあるのではないか。「話す」分野を、今後の開拓が期待される分野として捉え、指導法および教材を開発・共有していくことが必要であろう。

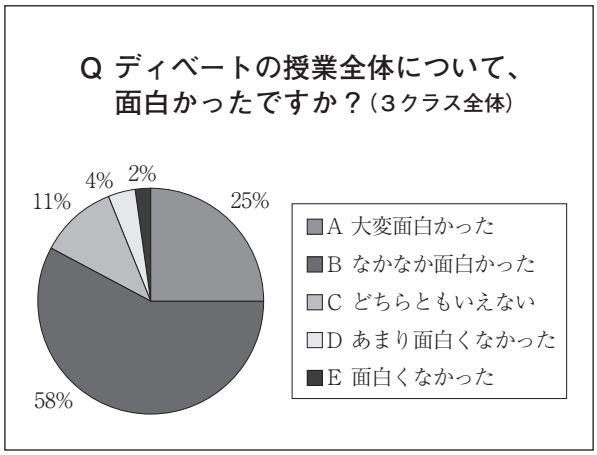

表１　　H16年度アンケート結果１

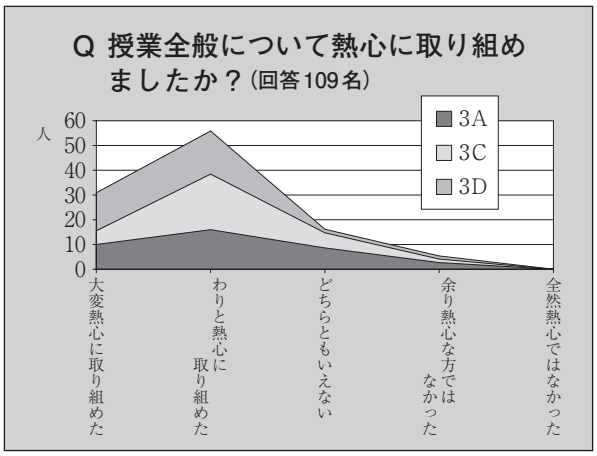

表２　　H16年度アンケート結果２

３．ディベート授業の経緯

稿者は、平成２年度より「国語」の授業にディベートの授業を取り入れてきた。対象学年は主に３学年である。ディベートを取り入れた動機は、第一に活気ある授業作りのため、第二にエンジニアを目指す以上論理的コミュニケーション能力の育成は必須であるが、ディベートならそれをゲームの形で習得できると考えたためである。

この試みを始めた当初は、日本語でのディベートが行われるようになって間もない時期であり、ディベートを授業で行うに当たっては、英語のディベート用語を日本語に訳すなど、土台作りから始める必要があった。指導法と教材の試行錯誤が10年余り続いた結果、ようやくどのクラスでも安定した授業展開が可能になり、個々の学生の達成感も向上した。平成16年度のアンケート結果からその成果が確認できる。83パーセントの学生がディベートの授業を「面白かった」と回答しており（表１）、また、８割以上の学生が「熱心に取り組めた」と回答している（表２）。レポートの感想欄には「聴衆なのに話しに入りたくなったときがあった。また、授業としてはとても楽しい授業であり、良い経験にもなる。友人の考えなど違う一面（知らない一面）も見れて良いことだった。」（H15 3A）などの意見が見られた。

なお、ディベートの手応えをもとに、平成15年度より、３年「国語」（通年２単位）の授業において、「コミュニケーションスキル強化プログラム」を試みた。「コミュニケーションスキル強化プログラム」とは、「聞く」・「話す」経験を重点的に積み重ねることによって口頭表現における言語運用能力の向上を目指すものである。後期全てを当てて、ディスカッション・スピーチ・ディベートを実施した。なかでも、スピーチの授業では、取り組みの初年度から良い成果を挙げることができた(4)。

さて、ディベートの授業は実践内容の大半が学生達による班ごとの作業であるため、学生達の作

図１　試合風景

業をねらい通りにまた効率よく進めさせるためには、その手引きとなる教材の役割は大きい。

授業実施に当たっては、教材として、様々なプリント配布物を作成し、改良を重ねてきた。ディベート授業を始めた平成２年度当初は、板書をノートに書き取らせる形で進めていたものが、平成16年度には16種類の教材を使用するようになり、短時間で確実な実践内容が可能になってきた。平成16年度に使用した教材について、ディベート授業の手順と対応させながら一覧にした表(表３)を示す。以下、「導入」と「試合準備」の段階に対応している教材①～⑩について分析し、個々の教材の作成の経緯、教材の有無やその内容が学生の学びやすさにどう影響したのかを明らかにし、今後の課題について考察する。

４．教材分析

導入：１ 基本説明

教材①「ディベート入門～創造的な議論のために～」(図２)

「導入」は、ディベート授業の全体の方向付け、動機付けを決定するものであり、牽引力のある的確な指導が要求される。

「１、ディベートとは」について。「徹底的に対立する」という方法をとることで「考えを深め」ようとするのがディベートの目的である。その「徹底的に対立する」という言葉を曲解し、相手をねじ伏せようという攻撃的態度で試合に臨み、果たし合いのような試合を展開するケースがあった。導入での方向付けが不十分だったことを反省させら

表３　ディベート授業の手順表

段　階	時間数	実施場所	実施内容	教材(40人クラスでの必要枚数)
導　入	２時間	ＨＲ教室	1 基本説明	①ディベート入門 (40)
			2 論題決め	(1)
			3 班分け	②クラス別　班分けシート (1) ③クラス別　論題・班分け・試合日一覧表 (1) ④全クラス　リハーサル・試合日程表 (1)
			4 班結成	⑤班別　登録シート (1)
試合準備	４時間	ＨＲ教室	5 試合の説明	⑥ディベートマニュアル(前半) (40)
			6 準備方法の説明	〃　(後半)
		図書館等	7 班別準備作業	⑦試合準備シート (40) ⑧データカード (40) ⑨立論清書用紙 (20)
	１０分	教　員　室	8 班別リハーサル	⑩リハーサル案内 (10)
試　合	５時間	ＨＲ教室	9 試合(全５試合)	⑪試合観戦フローシート・学生評価記入表 (32×5) ⑫判定用紙 (32×5)
総　括	１時間	ＨＲ教室	10 ベストディベーター投票・表彰	⑬ベストディベーター投票用紙 (40) ⑭表彰状 (2)
			11 レポート作成	⑮レポート表紙 (40) ⑯感想記入用紙 (40)
			12 アンケート	⑰アンケート用紙 (40)
所要時間　12時間10分			1クラスあたりの教材の必要枚数(合計677枚)	

れる出来事であった。それまでの板書と口頭による説明では限界があると感じ、平成15年度に①「ディベート入門」を作成し、「相手を言い負かすことが究極の目的なのではな」い、議論を深めるという目的のために敢えて対立という方法をとるのだと明記し、さらに「～創造的な議論のために～」という副題をつけてみた。熱する余りディベート本来の目的を見失いそうになっている班には、この教材に戻るようアドバイスしてみた。重要事項は口頭で説明するだけではなく、面倒でも文字媒体の教材として作成して学生に配布することで、理解と定着が格段に進む。教材にマーキングをしながら聞くことで理解が進み、また教材が常に手元にあればフィードバックが可能になる。今後もし、敢えて対立することの面白みを理解したことが伺える試合展開や試合後の感想がみられたならば、ディベートの実践が一つの到達点に達したことの指標になると考えている。

「２、ディベートをするメリット」について。何のためにディベートをするのか、授業のねらいを明確にすることで学生達の意欲を引き出したいが、抽象的な話だけでは伝わりにくい面があった。例えば、先輩達のディベートの感想を紹介することで、ディベートの面白さをアピールできないだろうか。「緊張したけどやってみると案外面白かった。」「試合中はスリルとおもしろみを感じながらやっていた。とても面白く、良い経験になったと思う」「考えもしなかった意見に出会ったりして、とても勉強になった。」「これからの人生にも役立つと思った。」「クラスの人の意外な面を見ることができました。」「チームワークの良さもこの試合では問われるのも面白いと思う。」（H15 感想欄より引用）試合に至るまでの準備作業は手間のかかるものだけに、予め先輩の生の声

ディベート入門　～創造的な議論のために～

１，ディベートとは？

ディベート（debate）とは、「ある論題について、肯定側と否定側とに分かれ、徹底的に対立して主張を展開し、最終的にどちらの側がより説得力があったかを第三者が判断する討論会」をいいます。

ディスカッション（discussion）は、「意見の一致を求め協力して問題の解決を図る話し合い」であり、時には妥協も必要となります。それに対してディベートのほうはあえて徹底的に対立することで考えを深めていこうとするもので、両者は性格を異にしています。

ディベートは、双方が相手側の欠点をつき自分側の正しさを主張しあい勝負を決める、一種の知的ゲームといえます。しかし、「相手を言い負かすことが究極の目的なのではなく、双方が問いを共有し、ともに何か得るところがあったと感じるのが、よいディベート」（「ディベートの方法」井上尚美）」なのです。

議論をしていて、異なる立場からの意見や反対意見であっても、それらがきちんとかみ合った形で積み上げられた結果、思いがけない新しい展望が開けたとい経験はありませんか。複数の人間が一つのことについて議論をすることの意義や、面白さはここにあります。ディベートが目指すのも同じ所です。表面的な勝負けばかりではなく、この議論で何が新しく見えてきたかに注目したいものです。

２、ディベートをするメリット

○論理を積み上げて意見を述べる経験を積むことで、説得する力が養われる。
○人の発言を集中して聞き冷静に分析することで、聞く力が養われる。
○議論に参加する時の基本的な姿勢を実践的に学べる。

３、ディベートの試合の基本的な流れ

	肯定側	否定側
立論と反対尋問	①肯定側立論 ④肯定側反対尋問	②否定側反対尋問 ③否定側立論
	作戦タイム	
反駁	⑤肯定側反駁	⑥否定側反駁
	作戦タイム	
最終弁論	⑧肯定側最終弁論	⑦否定側最終弁論
審査	（審　査）	

○立　　論　自分たちの意見の正しさを、理由を説明しながら主張する。
○反対尋問　相手の立論について疑問に思ったことを質問する。また、補足の説明を要求する。ここで、自分たちの主張を行わないこと!!
○反　　駁　相手の矛盾点や問題点について指摘する。
　　自分の主張の正しさが崩されないようにする。
○最終弁論　これまでの議論をまとめ、相手の主張より自分の主張が正しいことを再確認する。
○審　　査　審判が、肯定側･否定側のどちらにより説得力があったか判断し、勝敗を付ける。そして、判断の理由を講評として述べる。

図２　教材①ディベート入門

から試合の印象を知って期待感を高めておくことは、準備作業に対するモチベーションの向上に有効であろう。

「３、ディベートの試合の基本的な流れ」について。ディベートが初めての学生にとっても試合の流れが明瞭に見えるように、試合は「立論→反駁→最終弁論」の三段階で構成され、それぞれを肯定側・否定側が交互に行うことを図式化して示した。後述するように、**「導入：４ 班結成」**における班内での役割分担（立論・最終弁論の担当者）作業への布石となる。

導入：２ 論題決め、３ 班分け

教材②**「クラス別 班分けシート」**

③**「クラス別 論題・班分け・試合日一覧表」**

④**「全クラス リハーサル・試合日程表」**

論題は、それぞれのクラスで議論して、１クラスに付き５つの論題を決める。５つの論題のそれぞれについて肯定側・否定側の二つの班が試合を行うので、１クラスに付き10班を編成することになる。黒板に10班分の記入枠を記し、学生達が自分の希望する班枠に氏名を書き込む形で班分けをしていく。

ディベートを始めた当初は、Ｂ４用紙に記入枠を用意して学生に記入させていたが、用紙の周囲に人だかりができ作業は手間取った。時間のロスを無くそうと、次の時間までに各自記入しておくように指示した年度もあったが、班の定員割れや定員オーバーが生じ、かえって調整に時間を割くこととなった。調整が難航すると学生間の人間関係に悪影響を及ぼし、折角結成した班が機能不全に陥るなど問題も起きやすい。

記入枠は大きく板書して書き込ませ、後ほど②**「クラス別 班分けシート」**に清書するやり方が、これまでで最も手際よく進んだやり方である。板書によって全体像が見えると、学生達は自分の希望とクラスメイトの動向のバランスをとりながら自分の所属班を決めることができ、また、教員も班の定員調整に難航している状況について学生各々の気持ちを汲みながらフォローすることができる。

班分け作業が気持ちよく進むと全体の志気が上がり、班の連帯感も生じやすくなる。円滑な人間関係が、班別作業に必要な協調性・主体性・集中力の向上を引き出してくれるからである。手際の良い指導の運びが学びやすさに繋がることを意識し、たかが班分けと考えず、慎重に進めたい作業である。

班分け表に試合日を書き添え、③**「クラス別 論題・班分け・試合日一覧表」**として作成し教室掲示をする。内容の確認のためと、試合に向けての参加意識を高めるためである。④**「全クラス リハーサル・試合日程表」**も併せて掲示する。情報はなるべく公開し共有すると他の班やクラスの様子が垣間見え、学生達の刺激になるようである。

導入：４ 班結成

教材⑤**「班別 登録シート」**（図３）

班分け終了後、班ごとに集合して⑤**「班別 登録シート」**の記入を行う。まず、自分たちの班名・試合順と試合日・論題及び何側かをチームメイトと確認・記入する。試合順と試合日の記入欄については、H10年度より新たに追加したものである。班別作業を行う中で、どうしても自分勝手な振る舞いをする班がある。しかし、試合順・試合日の記入をすることで、自分たちの班は何日までに準備を整えておかねばならないのか自動的に認識することになる。些細な違いではあるが、この記入欄の追加によって、どの班も全体の流れに乗りやすくなり、結果として全体スケジュールの進行が格段に良くなった。こうした「記入の効果」については、他の場面でも応用ができそうである。

次に、**「導入：１基本説明」**で学んだ内容を基に、班内での役割分担（班長・立論・最終弁論の担当

ディベート班登録シート

３年Ａ科１班	第１試合に出場 試合予定日2004年11月15日
論題（死刑は廃止すべきか　　）	
○ 肯定側　・　否定側	

出席番号	氏　名	役割分担
12	○○　○○	班長
24	○○　○○	立論担当者
15	○○　○○	最終弁論担当者
4	○○　○○	

図３　教材⑤班別登録シート（記入例）

者)を相談・決定・記入し、班内での協力体制を作る。

試合準備：５ 試合の説明

教材⑥「ディベートマニュアル(前半)」(図４)

次に「試合準備」の段階に移る。準備作業は、学生達の作業が中心となるため、学生達の目線に立った分かりやすい指導が求められる。

「試合準備」の手始めとして、試合の詳細について⑥「ディベートマニュアル(前半)」「１、試合本番の時間配分と人数構成・２、試合のポイント」に沿って説明する。試合本番はどのような流れで行われるのか、ポイントは何か。既に役割分担が決まっているので、現実味のある話として具体的に説明する。「本番」という表現を用いているのは、緊張感や真剣味を引き出す目的からである。試合本番ではどのようなことをするのか見当がつくと、次の班別作業で作業それぞれの必要性・重要性が分かり、納得して作業に取り組みやすくなる。言葉による説明には限界があるので、今後は映像資料を活用し、過去の試合模様をビデオで見せながら説明することで、具体的なイメージを掴ませる助けとしたい。

ディベートマニュアル

～ディベートの試合に向けて準備しよう～

１、試合本番の時間配分と人数構成

時間配分

肯定側立論	5分
否定側反対尋問	3分
否定側立論	5分
肯定側反対尋問	3分
＝作戦タイム＝	2分
自由討論(反駁)	**10分**
＝作戦タイム＝	2分
否定側最終弁論	3分
肯定側最終弁論	3分
審判による判定・講評	10分
合計	46分

自由討論(反駁)とは？

決まった人が決まった時間発言するのではなく肯定側・否定側から自由に発言していくスタイル。とはいえ一人で制限時間を独占しないように気を付けよう。

人数構成

肯定側ディベーター（３～５人）
否定側ディベーター（３～５人）
司　会(１名)・タイムキーパー（１名）
審　判(聴衆全員、１名講評係)

図４　教材⑥ディベートマニュアル(前半)

試合準備：６ 準備方法の説明、７ 班別準備作業

教材⑥「ディベートマニュアル(後半)」(図５)

⑦「試合準備シート」」(図６)

⑧「データカード」(図７)

いよいよ準備作業に入る。⑥「ディベートマニュアル(後半)」の「２、試合の準備をしよう」に沿って、準備作業の進め方を説明する。準備作業の質の確保のためには、作業手順と内容を明確化し、さらに作業展開をメリハリのあるものとする必要がある。そこで、作業内容を６項目に分け、さらにそれをＡ・Ｂ・Ｃの３ステップに整理し、作業を見通しやすくした。⑦「試合準備シート」には、それぞれの記入欄が３ステップ６項目のどの作業内容と対応しているのか記した。６段階の作業全てを完了すると⑦「試合準備シート」への記入が完成する仕組みとし、達成感が得られるようにした。また、中弛み予防のため、ステップＢまで終了した班毎に、進行状況の確認を行うことにした。

「事前にどれくらいしっかり調べられていたかによって、試合での戦い方がかなり左右される。どんなことを調べたらよいかを的確に教えてもらえたので、調べやすかった。」(H15 3A) という意見があったことは、学生達の準備作業の順調さを伺わせるものである。

しかし、準備作業は煩雑な面があるため、迷走して作業が行き詰まる班も出てくる。実際に、準備不十分のまま試合本番に突入した班の感想である。「チームプレイである以上どんな些細なことでも意見はそろえる必要がある。そのためには緻密なプランが必要になってくる。私たちの班ではそこが上手く行き届かず、ごたついてしまった反省点がある。発言内容がきちんと決められていない状況でのアドリブは、焦るばかりで言いたいことの半分も説明できなくて残念だった。」(H15 3C) どの準備作業が試合にどのように生かされるかイメージしやすくするなど、準備と試合の対応関係を明確にすることで、準備作業が自然と牽引されるような教材作りが望まれる。今後の課題である。

準備作業を円滑にする工夫に加えて、学生達自身がやり甲斐と自信を持って準備作業を進められるよう、学生自身のモチベーションの向上を促す

2、試合の準備をしよう

ディベーターの仕事は、審判を納得させること。なるほどあなたの主張はもっともだ！と審判に思わせること。もし混乱してしまったら、この出発点に戻ろう。

準備の手順

ステップA

A－1自分たちが主張したい意見とは何か。相手側が主張する意見とは何か。チームメイトおよび相手チームと改めて確認しあう。
＝試合準備シート A－1 に記入

A－2自分たちの意見に論証を与えるための論拠を、3つ挙げる。
＝試合準備シート A－2 に記入

ステップB

B－3論拠を裏付ける具体例または説明を考える。
＝試合準備シート B－3 に記入

B－4論拠を裏付ける裏付けデータを用意する。
＝データの有無を試合準備シート B－4 に記入
＝データはデータカードに記入

ステップBまで終了したら、班ごとにチェックを受け、ステップCへ。

ステップC

⇒立論担当者は立論原稿執筆に入ろう。書き上がったらチームメイトに読んでもらおう。
＝立論原稿用紙に清書

⇒立論担当者以外の人は班長の指示に従って、相手側対策を行おう。

C－5相手側からどのような質問や批判が出されるか予想しよう。そしてそれにどのように答えるか、どのように反論していくか対策を練ろう。
＝試合準備シート C－5 に記入

C－6相手側は立論でどのような論拠を提示してくるか予想しよう。またそれに対してどのような質問や批批をしていこうか考えよう。
＝試合準備シート C－6 に記入

3、試合のポイント

○立論は堂々と
・自分たちの主張する意見について、「なぜ」そういえるのか明確な論拠を挙げながら論証する。
・試合の基礎となる柱を、肯定側・否定側各三本ずつ立てる作業。立論担当者は、十分練習し、堂々とアピールして欲しい。
・ビジュアル資料を用いるときは、綿密にリハーサルしておこう。

○反対尋問は質問タイム
〈質問する側に立ったとき〉
・相手側の立論を正確に理解するために質問する。相手の意見を理解して初めて批判が可能になる。
・誘導尋問的に相手の矛盾点・弱点を引き出せると素晴らしい。
・気持ちは分かるが、ここで先走って批判を始めてはいけない。
〈答える側に立ったとき〉
・質問に対して正面から答えよう。的確な答えは、丁寧な準備から。

○自由討論(反駁)は冷静に
〈攻撃するとき〉
・相手側の論拠について、本当にそういえるのか疑い、鋭く批判してみよう。枝葉ではなく幹を攻めること。
・その上で、自分たちの論拠が相手側の論拠よりも強力であり、従って自分側の主張がより正しいということを明快に論じていく。
・論拠を裏付ける具体例やデータを効果的に引用しよう。
〈防御するとき〉
・相手側の批判に対して、論点をそらさず誠実に対応していこう。
・感情的になったり、強弁（筋の通らないことをへりくつをつけて正当化しようとすること）や、詭弁（本来つじつまの合わないことを強引に言いくるめようとする議論）にならないように注意しよう。

○最終弁論はねばり強く
・これまでの議論をたどり直して議論をまとめるとともに、主張を再度訴える。ここで新しい内容を付け加えるのは反則行為なので注意。
・発言につまってしまったら、自分たちの論拠を一つずつ確認するという手がある。
・最終的な印象を決める重要な役割。諦めずに時間一杯頑張ろう。

図5　教材⑥ディベートマニュアル(後半)

データカード　　データカード №

3年(　　)科　(　　)班　班長名(　　)

論題：	肯定側・否定側
データのタイトル：	
裏付け：このデータは の裏付けとなる	
引用：	
情報源の種類(書名 著者名 出版社名・サイト名・番組名・インタビュー対象者 etc.)と名称 (　　)	
いつの情報か(発行年月日・アクセス日・放映日・インタビュー実施日) (　　)	

図7　教材⑧データカード

試合準備シート　　3年(　　)科　(　　)番　氏名(　　)

(　　)班　論題：(　　肯定側・否定側)　第(　　)試合　試合予定日(　　)月(　　)日

自分側のメンバー(　　) 自分側が主張する意見 A－1 (　　)	V S	相手側のメンバー(　　) 相手側が主張する意見 A－1 (　　)

自分側の論拠 (説明・具体例、データの有無)	(予想)　相手側からの質問・批判	→どう守るか	(予想) 相手側の論拠	→どう攻めるか
論拠1 論拠 A－2 (　　) 説明・具体例 B－3 (　　) データ(有 ・ 無) B－4 論拠2	C－5	C－5	C－6	C－6

図6　教材⑦試合準備シート

ことも重要である。ディベートの準備作業のノウハウを学ぶことで、将来的に諸々の場面で議論に臨む際の準備方法が学べると知れば、自分の人生に資するものとして取り組むことができるであろう。「今回のディベートを経験して、十分な知識と立派なデータと、そして勢いがあればしっかりと争うことが来出ると分かった。これは、これからの人生にも役に立つと思った。」(H15 3A) 周到な準備が議論で戦う力を生み出すこと、準備力が議論力に直結することを、自分自身の体験から気付き、将来への自信を得た例である。

先の意見は別の観点から見れば、情報リテラシーとコミュニケーションスキルの接点に気づき興味を感じた例とも言える。授業では、収集したデータを一件に付き一枚の⑧「データカード」にまとめさせ、把握できる範囲でなるべく多くの枚数を作成するよう指導した。試合をしながら、あるいは観戦しながら、一枚一枚の⑧「データカード」に記載された情報が武器であることに気づいた意見は数多い。「武器としての資料がたくさんあったほうがいいというのがわかった。」(H15 3D)「ディベートは下調べや予行練習がものをいうことを知った。データや資料がないと敵方の攻撃に対しての適切な対応ができないし、それが敗因になりうるからである。」(H15 3D)「聴衆としてディベートを聴いていると、みんなのディベートのレベルがとても高いことに驚かされた。特に聴いていて感じたことは、資料等をまとめている班は、反対尋問や自由討論に強いと言うことであった。また、そのような班では使わなかった資料も多くあり、十分な準備を行っていたのではないかと思う。」(H15 3A) 情報化社会を反映して、ディベートが情報戦化していることを伺わせる内容である。インターネット利用の恩恵でディベートの質は向上してきているが、情報に頼りすぎたり溺れてしまうことは避けねばならない。まず言葉の力、そこに情報を使いこなす力を組み合わせることが望ましいと考えられる。

また、「まず調べることから始めたが、情報量の多さにびっくりした。それらは知らなかったことばかりであり、知識を増やすこととなった。」(H15 3A) という感想には、世界が広がった事への驚きがある。ディベートの準備作業では主体的に考え調べていく事が要求されるので、受身的に知識を吸収する学習法とはひと味違った感動が期待できる。学生のモチベーション向上に繋げたい要素である。

試合準備：7 班別リハーサル

教材⑩「班別リハーサルの案内」(図8)

「試合準備」の締め括りとして、試合直前(主に前日)に、教員室において、班のメンバー全員と10分程のリハーサルを行う。リハーサルに先立って、各班に**⑩「班別リハーサルの案内」**を配布する。案内には「リハーサルの際に持参するもの」が記してあるが、準備作業を一通り終えると、持参すべきものがそろうようになっており、リハーサル前に班毎に準備作業についての自己確認を促す仕組み

になっている。

リハーサルでは、まず、これまでに準備したシート及びデータカードの記入状況から準備作業の進捗状況を確認する。次に、試合の予行演習として、立論スピーチの練習と反駁の演習を行う。反駁の演習は、教員が相手側に扮して、学生達に試合の一部を模擬的に体験させ、試合でのやり取りのイメージを掴ませるのがねらいである。リハーサルを行うことによって、準備作業については、どの班も試合前には一定の水準に達するようになった。また、反駁の演習は作戦会議の呼び水となり、班内の志気を高めるメリットがある。リハーサルの導入によって試合の質は格段に向上した。

以上「導入」「試合準備」に対応する①～⑩の教材について分析し、個々の教材について作成・改変の経緯を明らかにし、教材の追加・改良が授業効果に多大な影響を及ぼしていることを確認した。

教材は学生達が自分の足で目的地を目指すための「手引き」である。目的地と行き方が明確に示され、学生達を着実に導くものでなくてはならない。ただその導き方について、強引に従わせるのではなく、学生達を自然と牽引し、学生自身の自発的な「気付き」を促すような導き方が望ましいと考える。ディベートの授業が「創造的な議論」を体験する場となり、言葉の力によって問題を解決していくことの素晴らしさや面白さに気づく機会となることがディベート指導の目標である。そうした指導を可能にする教材を目指してさらなる改善に努めたい。

5　おわりに

ディベートを始めとするコミュニケーションスキル教育は、高専の学生が得意とする実習的要素を国語に取り入れることでもある。学生の反応は期待以上であり、国語を苦手科目とする学生にとっても新しい側面から興味・関心を掘り起こす十分な契機となる。国語はあらゆる科目の土台となる基礎中の基礎科目である。母国語を用いて思考し伝達することに理系・文系の別はないはずであるが、残念ながら、現実問題として、概して高専の学生の国語に対する認識は決して高いとは言えない。しかし、高専における国語の役割そして可能性を十分に踏まえた説得力のある内容構成を提示し、学生の興味・関心を引き出すことが出来れば、学生の国語力の着実な向上が期待できると考える。

コミュニケーションスキルの育成は、その必要性が認識されていながらも、その実践については近年になって漸く手が付けられ始めたという段階であり、高専のみならず日本の国語教育が手薄としてきた分野であるといえる。教育指導要領にも受験国語にも縛られない高専国語は、その自由度の高さと、５年間という長期の教育期間を生かし、コミュニケーションスキル能力の育成に積極的に取り組んだ、独自の且つ新しい教育内容を提供できるはずである。それは、高専国語のみならず高専のカリキュラム全体にとっても大きな収穫となるのではないだろうか。高専国語を展望し、高専国語に相応しいテキストを編むことが今後の課題であると考える。

３年Ｄ科Ａ班　班長(○○○○)
11月８日(月)　12:30～12:40

ディベート　班別リハーサルの案内

1．ディベートの試合前の上記の日時に、一班ずつ10分程度のリハーサルを行います。
○リハーサル内容は、以下の３点です。
①準備状態の確認
②立論スピーチの練習（持ち時間は５分、時間を計ってみます）
③反対尋問等の練習
○場所は柴田(美)教員室(電子棟1F)です。
○班のメンバー全員で、時間厳守で来てください。

2、ハーサルの際に持参するもの
○試合準備シート（班のメンバー全員分。班長は記入状況をあらかじめ確認しておいてください）
○データカード
○自分たちで集めた資料などのうち、本やプリントアウトしたもの等の持ち運べるもの
○立論原稿（あらかじめ班のメンバーと下読みしておいてください
○プリント（ディベート入門・ディベートマニュアル）

班長を中心に、協力して準備にあたりましょう。
なお、試合の際に必要な機材(プロジェクター等)があれば、早めに知らせてください。

図８　教材⑩班別リハーサルの案内(記入例)

【 注 】

（注１）「日本技術者教育認定基準（JABEE）」（2004－2006年度版　2003年11月25日理事会承認）基準１　学習・教育目標の設定と公開（1）（f）「論理的思考に支えられた明晰な日本語によって記述し，発表する能力，学会等において討議できるコミュニケーション能力および国際的な場でのプレゼンテーション等の基礎的コミュニケーション能力を持った技術者の育成」

「小山工業高等専門学校の教育目標」（2007．1．17版）「教育方針と育成する人材像」「⑥コミュニケーション能力と国際感覚の育成」「講義・実験・卒業研究の内容について日本語で口頭発表・質疑応答ができること（準学士過程）」「特別研究を含む専門分野の内容を学内・学外において日本語で口頭発表・質疑応答できること」

（注２）但し、コミュニケーションスキル教育の取り組みは、文学教育の安易な排除につながるものではない。論理を重視するコミュニケーションスキル教育と独創的感性を重視する文学教育の、両者のバランスが重要である。

また、コミュニケーションスキル教育の実用性・即効性を重視する余り、文学教育がこれまで地道に築かれてきた人間性を豊かにする教養の領域を軽んじる傾向を生んではならない。これら両面を授業内容に盛り込む工夫と努力が求められよう。

【 参考文献 】

（1）平成14－15年度　国立高等専門学校協会教育方法改善（東北地区高専）共同プロジェクト「高専における国語コミュニケーションスキル教育の評価と改善中間報告書」第３章高専におけるコミュニケーションスキル教育の現状と課題（H16.3）

（2）高専教育方法等改善研究委員会国語部会「高等専門学校における国語教育に関する第二次調査」平成３年７月実施

（3）（1）に同じ

（4）柴田美由紀「高専におけるコミュニケーションスキル教育－スピーチの実践例を通して－」（「小山工業高等専門学校研究紀要」第37号　H17.3）

小山工業高等専門学校　一般科
Miyuki-s@oyama-ct.ac.jp